

島崎藤村『新生』論

—照応する表現構造とその帰趨の意味をめぐって—

Shimazaki Toson's Shinsei

瓜 生 清
URYU Kiyoshi

(国際共生教育講座)

(平成二十二年九月二十一日受理)

はじめに

『新生』(前篇・「朝日新聞」大7・5・1と同上10・5、後篇・「朝日新聞」大8・4・27と同上10・23)は、前半生の愛の虚妄というトラウマ体験、歪んだ「信の無い心」(前篇百三十二回、以下(前132)のように略記する。)>という女性不信に苦しんだ主人公岸本が、内的な賦活を実現することを得て、叔姪の間において頽廃とまったく位相を異にする愛の誠の実行者に脱却し、この世ならぬ愛の関係に到達する人間変容の物語である^(注1)。

このような岸本の決定的な賦活の問題に言及した藤村の資料がある。「随筆」(大15・11)に発表された「感想」と題する全集未収録資料で、

すでに小林修の『『藤村全集』逸文「感想」について』^(注2)に報告がある。小林が翻刻紹介したエッセイに注目することから論を進めていきたい。まず「感想」の資料的価値に関係する真率な自己言及性について確認する。周知のように、『新生』の作因については、ひとりよがりの欺瞞や艱晦等を嫌悪する根深い批判がある。そのような論断に抗弁した「芥川龍之介君のこと」(『市井にありて』所収、昭5・10 岩波書店)『『寢覚』附記』(定本版『藤村文庫』第七篇『道遠し』下巻、昭13・6 新潮社)等の自己弁護と一線を画している「感想」の率直な自己言及性にこだわっておきたいのである。

このエッセイは、正宗白鳥「文芸時評」(「中央公論」大15・10)中の「懺悔文学」における『新生』の論評に不満を持った藤村が、『新生』の

(2)

作意について積極的に開陳し、白鳥の理解を修正しようと意図したものである。問題の急所は「懺悔文学」に藤村がどのように反論しているかに尽きるのであるが、それについて言及する前に、率直な思いが披瀝されていることを確認するために、煩雑になるが「文芸時評」の最初に置かれた「島崎藤村氏について」の内容に言及しておく。

白鳥の「島崎藤村氏について」は、戦後中村光夫『風俗小説論』（昭25・6 河出書房）が、『破戒』（明39・3）から『春』（明41・10）への屈曲をめぐって、田山花袋の「蒲団」（『新小説』明40・9）の出現が決定的な影響を行使していった結果、批判的リアリズムを流産させていったという近代文学史論として提出した有名な仮説に重なる指摘がすでになされていたことにも関心があるが、「感想」における藤村の書き方で興味深いのは、花袋の「蒲団」の発表が藤村を動かしたであろうという白鳥の推測に同意を与えていると同時に、モデル問題という別の要因が積極的に働きかけたことを、当事者である立場から進んで証言しているのである。馬場孤蝶「島崎氏の『並木』」（『趣味』明40・9）等の異議申し立ての外圧が、作家の表現の意思を屈服させたことを認めた異例の発言でもある。

さて、このような内幕を積極的に明かした言及の後に続いている「感想」の自作解説が一層興味深くなる。この反論は、懺悔の語義をキリスト教的なニュアンスを強く意識して論じたことへの訂正の申し立てである。藤村が『新生』をこう読んでほしいと願った作意への強い固執に注目しておきたい。

正宗君が同じ文芸時評の中に、私の『新生』を懺悔の文学として批評されたのは、私としては物足りない。あれは懺悔の文学といふよりも、衝動の文学（傍線稿者、以下同様。）として取扱つて欲しか

つた。あの作の中にある懺悔といふ言葉はそれほど重い意味で書いたつもりではなかった。作者はいかに人間の衝動といふものを見直さうとしたか、道徳ならぬ道徳の曙光を新生と言つて見たのが無理だつたか、さういふ点から正宗君の批評を受けたかつた。

「衝動」の語義は、岸本を罪科に誘惑した本能的な情動の意味ではあるまい。それは、序の章第五節において、岸本が強く迫ってくる「一生の危機」の重圧感の中で、「火か、水か、土か、何か斯う迷信に近いほどの熱意をもつて生々しく元始的な自然の刺激に触れて見たら、あるひは自分を救ふことが出来ようかと考へた」という危機を突破するために内面の賦活を渴望する一節に凝縮されている。「衝動」は、「道徳ならぬ道徳の曙光」が生れるための不可欠な因果関係で説明されている構文から解釈を導くならば、人間の内面をはげしく揺さぶって変革させる衝迫という意味である。「感想」を翻刻した小林修は、「衝動」について「頽廢と懊悩のギリギリの底から衝き上げる回生の力と言へばよいであろうか。」と述べているが、妥当な理解であろう。なお、小林は言及していないが、前篇最終回において、戦時下の国難に国民こそつて殉じようとする愛国的な気運に感化されて生まれた「死の中から持来す回生の力」（前135）に到達する岸本がいる。この熱度のある表現を参照すると、文字通り「起死回生の力」を意味すると解される。

しかし、序の章の岸本は、外側からもたらされる衝迫を願望しているのであり、自力による内面の立て直しではない。それが姑息な手段であったことは、序の章の五月を一気に過ぎ、年が改まって節子の懷妊というのっぴきならない破局に直面する皮肉な展開で岸本は思い知らされる。要するに、岸本が序の章で求めた激しい再生の願望は、他力的な僥倖に過ぎなかった。岸本は自力で「回生の力」と出会うために、渡欧という

長い迂回路を辿ることになるのである。

本論・その一

(一) 岸本の「信の無い心」の形成とそこからの脱却過程

岸本の再生とは、生存の意義に懐疑する退廃傾向から、「生の充実といふ現代の金口」(序1)、つまり時代風潮であった生命の発揚という現代的な重要な課題を、自らの病弊を克服して実現する過程でもある。そのことを作品全体に拡大するならば、序の章・前篇の表現の意味は、自己糾問を重ねる岸本の葛藤の中で徐々に変容され、後篇においてその変化の到達を確認できる照応表現が顕著なことである。たとえば、凍り果てた極北の赤い太陽は、岸本の内面の隠喩表現として前篇に頻出する(前11・116・124)。その陰惨な太陽のイメージは、巴里留学時代の冬の景観を回想した後篇五十八回に後篇で唯一書かれているが、かつて岸本の内面の象徴表現であった太陽は、帰りついた故国の小春の眩い冬の陽光によって完璧に払拭される場面で変容を完成する。このような照応表現に提示される岸本の内的転回を浮き彫りにする必要がある。

照応表現を前篇から出現の順に掲げると、①ボードレールの詩篇「秋の歌」への共感的な自己仮託、②「音楽」への親炙・渴望、③留学生岡との会話で煮詰められた「愛する心」への共感的回帰、④若き日のアベラールの英雄的な恋愛への傾倒等の叙述が、後篇において表現の照応構造を完成し、深い高調された愛の歓喜への到達を歌い上げていることに注目していきたい。

前述の女性に対する根深い不信の出発点は、留学生岡が苦しい失恋を告白した前篇七十六回に接続して書かれる貧しい白面の青年であった岸

本が、相思の閨柄である勝子をめぐって争った屈辱に満ちた「愛の為すなき」(前130)結果にはじまる。若い岸本の恋愛への目覚めは、彼を成長させる原動力である「若い生命」(同上)を動かしていく。その歓喜もつかのま、「心のまこと」(同上)という恋愛至上の觀念に殉じた岸本は、婚姻の可否以前の「経済上の安心」(同上)という身も蓋もない世俗的な理由で一蹴されたのである。因みに、岸本と岡の失恋に関して「心のまこと」(前76)という同じ表記が行われているのは、両者の悲恋の同一性に関連する。なお、岡を励ますために岸本が紹介した旧友青木の言葉は「誠」と書き分けられている。要するに、先を見通して言えば、若き日に挫折した岸本の「心のまこと」は、長い「信の無い心」を経過して、節子との間に人を結び合わせる愛の力という「誠実」を復活させるのである。

青年岸本の当世風の恋愛至上主義は現実の壁の前に惨めに崩壊したのである。この経緯には、恋愛至上主義者の青年が純情の愛を傷つけられただけでなく、愛とは無関係の理由によって門前払いを受けた二重の屈辱がある。不縁の結果は、若い自恃の心を傷つけるわだかまりとして残った。怨念としてのトラウマである。

こうして序の章の中年の倦怠と疲労に喘ぐ岸本のデカダンスの淵源は、若き日の失恋体験にあり、そこから内攻した「信の無い心」の形成が関係していた。「彼がもつと女性を信ずることが出来たなら(中略)信の無い心―それが彼の落ちて行つた深い深い淵であつた。失望に失望を重ねた結果であつた。そこから孤独も生れた。」(前132)と悔恨しているように、「苦い愛の経験」(前131)の幻滅に懲りて慎重居士に徹した岸本であつたが、その女性への猜疑によって歪んだ不自然なリゴリズムは、妻園子との結婚生活にも隠微な災いとなって苦しめる。妻と心を通わすの

に十二年を要したこと、自然な関係を築き上げられなかった陰湿な「両性の剋し合ふ」(前9) 葛藤から生れた結果が、性愛による相互支配という墮落であった半生の結末を総括した痛恨の情は深いのである。「心の毒」(前14) というデカダンスが必然となるわけである。

(二) 「秋の歌」第一聯の詩句が地の文化されて叙述されていること、及びその内容の三段階の変容

『新生』では、太陽の表現に関連してボードレールの名前が明示されるのは、「あのボオドレエルの詩の中にあるやうな赤熱の色に燃えてしかも凍り果てるといふ太陽は、必ずしも北極の果てを想像しない迄も、巴里の町を歩いて居てよく見らるゝものであつた。」(後58) と書かれている箇所が唯一である。その他は匿名化されているのである。さらに岸本の愛誦詩「秋の歌」の詩篇名も無記入である。そして、赤く凍てついた太陽を表現した詩篇の詩句までが、地の文に変えられて叙述される。その結果、岸本の理解となった地の文の表現は、岸本の心象風景となり自己表出性を一段と強める。

先に太陽のイメージの変容について見通しておくならば、渡仏前の発端、渡仏中の展開、帰国後の終結という三段階の変容を重ねていく。岸本はなぜこの赤く凍りついた太陽を歌った「秋の歌」に愛誦詩を発見したのか。それは、渡仏前の東京浅草時代の終わりの大団円を回想した後篇七十一回に、禁忌を犯す直前の寂寞状態が「氷の世界」という表現で確認されている。この氷を使った冷え冷えとした「心胸」の虚無的表現が、「紅くしてしかも凍り果つる北極の太陽」(前116) にのめり込ませる基盤的自己把握なのである。そして灼熱と氷結という対立するイメージ

が錯綜した太陽は、虚無とその超克という葛藤を精神の基本構造とする岸本が共感するのも分りやすい。そうすると、岸本が繰り返して自分の心胸の嘆きを仮託した太陽は、寂寞とした虚無感の支配と、それに抗って打破しようとする意欲との間で宙吊りになった二律背反的苦悩の暗喩表現となりえているのである。そして、海の外に旅立った岸本は「紅くしてしかも凍り果つる北極の太陽」という葛藤のイメージの中に彷徨うことになるのである。

渡欧後、岸本は暗い巴里の冬空に陰惨に浮ぶ太陽について、「岸本は左様した頹廢した心を有つた人が極度の寂寞を感じながら曾て斯の世を歩いて行つたことを想つて見た。その人の歌つた紅くしてしかも凍り果るといふ太陽は北極の果を想像しないまでも、暗い巴里の冬の空に現に彼が望み見るものである」(前116) と認識を新たにしているが、「現に」と強調する構文において、満たされない心の寂寥感という病んだ時代精神は、完結した過去どころか今現在に流動していることを強く示唆する典型的人物として例示されているのである。つまり、渡欧前の岸本の精神の葛藤を主情的に投影する愛唱詩から、ラテン民族の学芸に触発された広い「眺望」(前113) によって可能になった仏蘭西社会の根底に流動している寂寥感という新たな歴史的視点からの考察が加わっていることに重大な変化があるのである。それが、帰国後の冬を迎えた岸本が、燦燦と降り注ぐ小春日和の陽光の中、「信の無い心」から生起した寂寥感を完全に止揚する節子との関係を作り上げたことを賛美することで、内面の象徴としての地の文化された表現に終止符を打つのである。

本論・その二

(一) 岸本の若き日の「愛する心」への共感的回帰、及びアベラール・エロイズを通しての信愛の可能性

岡は愛が無慈悲に破局に向かわされる一部始終を詳述する。前篇七十回の岡は「堅く相許した心のまことを置いて、この世の何物が人を幸福ならしめるであらう」と失恋にこだわり続け、前篇七十六回に「これほど相許した心のまことを踏みにじらうとする彼女の母親は悪魔である」とまで激昂する。一本気な岡の受けた打撃は若き日の岸本と相似形である。この綿々と続く述懐が、岸本に青年期の自分の痛切な恋愛体験の光と影をいきいきとよみがえらせる。「まこと」を貫こうとして拒まれた岡の悲劇に間近に対峙した岸本は、「まこと」を保持せんとする岡の切ない純情を介して、愛の虚妄という固定観念の中に封印してきた「愛する心」に目覚めなおすことになる。

「旅に来てその晩ほど、彼は自分の若かつた日の心持に帰つて行つたことは無かつた」(前¹³³) 岸本は、もう一度恋をよみがえらせるという問いかけを自問する立場に誘い込まれる。その結果は「左様だ。何よりも先づ自分は幼い心に立ち帰らねば成らない。」(前¹³³) という決意に繋がる。「幼い心」については、姜政均『『新生』—「幼い心」の機能^(註4)』が、青年時代を指していると考察しているが、愛の虚しさに毒される以前の若き日の熱烈な信頼の心が「幼い心」である。前篇百三十四回の書き出しは、「頑な岸本の心にも漸くある転機が萌した。」と、転換に達する。これが後篇において大きく変容されることで照応させられているのである。すなわち、「信の無い心」から「愛の誠」への転換である。後篇五十三回に「その時になって初めて彼は節子に対する自分の誠実を意

識するように成つた。」後篇五十五回に「彼は節子に対する自分の誠実を意識すればするほど、長い間の罪過の苦痛から脱却して行かれる」、後篇五十八回に「道ならぬ醜い関係の底から是だけの誠実が汲める」等と立て続けに強調される。「心の誠」をささげ尽くすことへの転回に岸本の迂回路の終着点があるのである。

失意の岡を慰めることをきっかけに、岸本は現在のデカダンスの遠因であり、固執と化した愛は虚妄であるという偏向した観念を問い直す。たとえば、前篇七十七回の末尾には、アベラールとエロイズの愛の伝説に傾倒した若き日の記憶が振り返られ、「岸本はもう一度斯の事蹟を想像して見て、独り居る無聊を慰めようとした。」と変化の兆しを示す。「信の無い心」に凝り固まって以降、岸本が笑止と決め付けていた相思相愛の関係が確認された驚きである。さらに「岸本に取つては旅の心を引く一つの事蹟があつた。他でもない、それはアベラールとエロイズの事蹟だ。(中略) アベラールとエロイズの愛。何程青年時代の岸本はその奔放な情熱を若い心に想像して見たか知れない。あの学問のある尼さんのためには男も捨て僧職も擲つたといふアベラールの名は何程若かつた日の彼の話頭に上つたか知れない。」(前⁷⁷) という件は、恋愛至上主義という観念に魅入られた青年岸本にとって理想的な男女関係で、そのためにアベラールが名声・地位等の一切を犠牲にしてまで突き進んだのはヒーロー以外の何者でもなかった。そのような恋愛観を強固に奉じていた時代の重要なエピソードである。

アベラールに触れたロセッティ訳のヴィヨンの詩が引用された件に続く次のような一節も、岸本の変容過程として注目しておきたい。「岸本が友達と一緒に斯の詩を愛誦したのは二十年の昔だ。(中略) あの敏感な市川が我と我身の青春に堪へないかのやうに、『されど去歳の雪やい

(6)

づこに』と吟誦して聞かせた時の声はまだ岸本の耳の底にあつた。」(前77) という恋に酔って昂揚する友人市川の若々しい情熱家の姿を回想することで、かつて岸本自身が恋に生きようとした勇姿は彷彿と蘇る。そして、後続の「岸本はもう一度斯の事蹟を想像して見て、独り居る無聊を慰めようとした。」という表現で受けとめられる。これは、若き頃の放恣な陶酔ではなく、中年の抑制された内観によって再度吟味が行われていることになる。愛は虚妄であるという殻に閉じこもった片意地から、徐々に変化していこうとする重大な兆候である。そして、前篇百三十三回の「幼い心」へ回帰する明確な意思を表明する岸本が、ようやく「心の無い心」に毒されるはるか以前の「自分の若かつた日の心持に帰つて行」く変容を實現していくのである。

先走って言うと、後篇百二回において岸本が到達した世界を代弁する『時』の翹もさながらに二人の上に休らひぬ。／噫、うち寄せむ、胸と胸、これや変らぬ珍宝、／美し契のこまやかにたとしへもなきこの刻、／二重に合へる静けさぞ君と我との愛の歌』という時間を全て超越した深い愛の合一の陶酔を歌い上げているロセッティ「生命の家」の詩句が引用されたあとに、岸本と節子の間において「アベラアルとエロイズの愛」(前77) に照応する関係が具現化されるのである。その時の岸本と節子の親愛の姿は、次のように書かれる。

彼は六畳の部屋の片隅に子供の着物などを入れた古い簞笥の前に居て、そこに足を投出しながら、しばらく障子の開いたところからうち濕つた秋の空を眺めて居た。側には節子が針仕事する手を休めて、同じやうに簞笥に倚りかゝり、同じやうに白足袋はいた足を延ばし、丁度並んだ男女の巡礼のやうに二人して通り越して来た小さな歴史を思ひ出し顔であつた。

インセストの苦悩を昇華するために艱難な長い旅路を歩んできた二人の至福を凝縮した含蓄のある表現である。高輪「東漸寺」の境内を散策する道行の場面(後77)に通じる静謐で深い愛の精神性を讀める表現である。傍線部の信頼しきって足を投出している二人の姿は、ペール・ラシェーズの墓地に祀られた「深い恍惚の世界の象徴」(前133)として横たわっている「二人の寝像」に似通う心安らいた打ち解けた姿態によって照応する表現構造を完成していくのである。

(二) リモージュの客舎で岸本に到来する賦活としての「幻覚」、及び宗教的体験の内実

リモージュの客舎で、東京浅草時代の最後の頃の身の行き詰まりから「地獄」(前105)「畜生の道」(同上)の破局へと回想を遡らせるとき、突如幻覚が岸本に襲来する。

不思議な幻覚は眼前に見る仏蘭西の田舎家の部屋の壁を一面の焰のやうにして見せた。曾ては岸本が記憶に上るばかりでなく、彼の全身にまで上つた多くの悲痛、厭悪、畏怖、艱難なる労苦、及び戦慄——それらのものが皆な火のやうに眼前の壁の面を燃え流れて来たかと思はせた。

「幻覚」が出現する心理状態を確認すると、これは突然生じた事態ではない。戦火を避けたリモージュは、「仏蘭西の旅に来てからの初めての休息らしい休息」(前100)を恵む。そのような心境の安定に呼応して、渡仏へ到る恐怖と狼狽を重ねた過去がまとまって捉えられ、それに合わせて新たな内心の聲が生れるのである。「自分を欺くことの出来ないやうな声」(前101)の糾問によって「世にも浅猿しい自分本位の人間の」

人ではないか」(同上)という痛切な自責に突き当たる。事件の核心から眼をそらさなくなった岸本の心理を受けて、「七年の生活の終の方へ。」(前105)と、以下「懷疑」・「寂寞」・「疲労」等の病んだ岸本の内面に関連する形容語句を「∴の方へ。」と、七回もたたみかけて繰り返す表現によって、その重く加速された切迫表現は、岸本の内面の緊張を極点までにヒートアップさせる。その時、岸本の病んだ内部を浄化する「幻覚」を生み出したのである。

つまり「生の水」という隠喩表現の源にあった「悲痛、厭惡、畏怖、艱難なる労苦、及び戦慄」という半生の生活の行詰まった澱んだものの数々が、「皆な火のやうに」「燃え流れ」て灰燼に帰するように思われるカタルシスが実現しているのである。前半生の岸本を拘禁していた「生の水」に風穴が開いたことを感知する決定的な瞬間である。内面の賦活に働きかけた衝迫の激しさが具体化された「衝動の文学」の典型的な場面と称しても過言ではないと思う。説明は不要と思うが、このように出現した「幻覚」は、もちろん「幼い心」への切実な回帰の場面も同断であるが、岸本の退路を絶った真摯な自己糾問によって誕生したものであって、他力的な僥倖ではない。

ところで、下山嬢^妹子は、序の章第五節の地水火風という「自然の刺激」、いわゆる四大を重視し、本文中の関連表現の解釈に力を注ぎ、リモージュ滞留時代に顕著な宗教性について、「序の章に言う仏教的〈地水火風〉の全てが用意されたりモオジュにおいて、岸本はその悉くに触れ、又〈人〉として基督教的〈永遠〉の前に佇む時を所有したことによって、即ち、この地で東洋と西洋の区別を越えた《聖なるもの》に触れられるという体験をしたことによって、存在の根底から大きく変えられる。」と、踏み込んだ解釈を展開している。岸本に作用した「四大」、及び宗

教性の内実について検討しておきたい。

まず確認したいのは、「四大」が岸本の浄化作用にどのように関係していたかという点、上記の焔の「幻覚」場面、モデル老婦人の死去の通知(つまり「風」の便り)を受け取り、「ツツサン(死者の祭)」の式典に連なる場面(前106・107・108)を除くと、「地」に関連して、岸本が逍遙する牧歌的な耕地が彼の内面の安定に働きかけていることは認められるが、「水」については賦活という決定的な働きかけとして特段に強調すべき作用を見出しがたい。

岸本の感慨は、「しばらく自分のたましひを預けて行くことを楽しみにした。あだかも樹蔭に身を休めて行かうとする長途の旅人のごとくに。」(前107)とあるように、いつ幽囚の身に終止符を打つことができるか定かではない漂泊者の惑いが色濃い。その訳は、罪科の許されるのを待ち続ける流謫の刑を受けた者の流浪意識であるからだ。サン・テチエンヌ寺院の「ツツサン」に参詣した岸本が、ミサの進行に合わせて、最後に「十字架を負ふ人と成つた極端な仏蘭西の物質主義者」らを想像したりするのであるが、唯物主義から宗教による甦生に転じた回心者と比べて、岸本に到来している宗教的なドラマ性は希薄である。ここに読み取るべきことは、つかの間の旅情に憩えるような落ち着きと、一時的にかなえられた深い心の安らぎという次元の内容であろう。神を讃え、罪の贖いを願う儀式の場所を、行きずりの旅人としてよぎっているのである。現世を超越した恩寵体験を読むのは拡大解釈であろう。

角度を変えて、上記のミサに連なり「永遠」の一瞬を体感した宗教的法悦の件を俎上にのぼすと、「唯彼は石の柱の側に黙然と腰掛けて、仮令僅かの間なりとも『永遠』といふものに対し合つて居るやうな旅人らしい心持を味つた。」(前108)と書かれている。ここで五回「忘れる」と

いう表現が多用された後の件であることは、眼前の光景が消え去るような「忘我」の境地であることは認めなければならない。すでにリモーシュの壁に炎の幻覚を見る直前に、「：の方へ」という語句を使った反復表現があったことを確認したが、語り手はこのような表現上の多用に意識的であるのはいうまでもない。しかし、助動詞「やうな」が受ける内容は、異境を流離う「旅人」の心情を比喻した表現である。構文全体の表現の直接的な指示性は、助動詞「やうな」が受ける『『永遠』といふもの』に「対ひ合つて居る」ではない。このような文脈も、決定的な恩寵体験と解釈するには不審をぬぐいきれない。表現が法悦的瞬间に沈潜したことを述べているのは確かであるが、岸本の内部を根本から転倒させた決定的な体験として語ってはいないと考える。

その他、前篇百二十六回において、岸本がイエス・キリストの受難を想起し、これにあずかろうとする四旬節（ローマ教会で復活祭前の四十日間の斎戒期のこと。）に、自分の試練を重ねて記した散文詩風の文章を読み返す場面がある。その深い「旅情」を記した一節に「旅人よ。足をとゞめよ。この国の羅馬旧教の季節が来て居る。お前も来て、主の受難を記念する夕方に憩へ。お前に食はせる麴麴、お前に飲ませる水ぐらゐはこゝにも有らうではないか……」とあるが、下山は「主の受難を記念する」のは四旬節後の復活祭であり、「死から甦り給う〈主〉を記念して行われる〈麴麴〉と〈水〉の聖餐式、その食卓に招いてあげようという呼び掛けである。」という解釈をしている。果たして救い主であるイエス・キリストの復活を記念する祝祭日を指していると解しているのだろうか。岸本が自分の文章を読み返した時は「仏蘭西の暦は三月の来た」ことを語つて居た。」と明確である。復活祭とは、春分後の最初の満月のあとの日曜日がそれに当たるのである。であるから、この場面は復

活祭の前の四旬節の期間内のことである。傍線部の「麴麴」と「水」も四旬節の間の厳格な食事の節制を守る節食の意味である。そうすると、依然として岸本に試練の意識は鮮明であると解釈できる。ちなみに、作中の時間である千九百十五年（大正四年）のローマカトリック教会の復活祭は四月四日である。

後篇の帰国を決意した岸本が内省して得た結論は、自身も再婚し、節子にも良縁を勧めることで、周囲を安心させ新しい生活のやり直しが出来るという「方針」（後22）であった。これは、上記の宗教的なものに触れた人間としてはあまりに現実的な思考法から一步も出ていないし、それに気づいていないのも不可解である。後篇の五十三回に、異境での贖罪の旅について「その時になつて初めて彼は節子に対する自分の誠実を意識するやうに成つた。長い懊惱も、憂鬱も、忍耐も、寂しい――異郷の独り旅も、すべては皆この一つを感知するために有つたかのやうに思はれて来た。」という重要表現があるように、それまで、岸本はそのことに無自覚であつたことを雄弁に示している。「誠実」の自覚を俟って、渡欧をすることはその気づきを実現するための長い回り道であつたという決定的な自覚の箇所であるが、この間帰国後において「超越的なもの」に触れた体験、見られるものへの転倒等の自覚は、そのような気づきを促す意識下の契機としてたえず関与するような働きをしても不思議ではない。もっとも解しかねるのは、下山が説くようにリモーシュ滞留時の体験が決定的であるならば、節子への「誠実」を深く自覚した以降において、岸本がその原点となつた体験を辿りなおすような呼応場面があつてもよさそうであるが、それらが見当たらないのも訝しい。三好行雄が、リモーシュ滞在中の宗教性を結局一過性のものと断じているのも十分な理由の存することである。^(註6)

その他、下山は、後篇の岸本と節子の関係の深まりを、隣人愛というキリスト教倫理から説明している。しかし、キリスト教倫理の他者たる隣人に対する愛の発現と理解すべきなのか。下山が論拠に当たる表現として引証している本文は、「お前はほんとうに人を憐^{あは}んだことがあるか。もう一度夜明を待受けるやうにして旅から帰つて来たお前の心は全体の人の上に向つても、お前の直ぐ隣に居る人の上には向はないのか。」(後37)、「人間のためと言ひましても、自分のすぐ隣に居る人から始めるより外に仕方がないと思つたんです。そこで私は奈何かして節ちゃんを生かしたいとも考へるやうに成りましたし、子供も自分で育て、見る氣に成つたんです。」(後135)等のいずれの場合も、濃密な血縁関係としての隣人であり、聖書的な狭いエゴイズムを超えた広義の他者性を志向していない。取り分け後者の例は節子・子供という最も身近な血縁を指しており、不特定多数の他者へ広がっていく人間愛とは逆のベクトルを意味している。『聖書』の《隣人愛》の教えと同等」といえるのか。キリスト教倫理としての「隣人」の発見という理解は同意しがたい。

(三) 岸本が獲得するフランス理解の広い「眺望」

フランスの事情に不案内な岸本を心配した番町の友人は、様々な便宜を用意した友情に厚い知己である。岸本はこの友人を介してフランス人社会との交友の糸口となる女性に引き合わされていた。それは岸本が深交を結ぶモレル老婦人の姪であつた。「紫式部の日記」(前60)を読みこなす程の日本文化の素養を蓄えた「日本狂と言ひたいほど日本眞顧の婦人であつた。」(同上)として紹介されている。渡欧前の対面は、そのあまりに熱狂的な日本趣味への同化について、いささか不可解な感想を

禁じえなかつたであらう。

ところが、岸本は渡仏後早速訪問したモレル老婦人が「居間の壁に掛けてある日本の古画」(前60)を眺めながら、「日本といふものは、私に取つては空想の郷でしたからね。」といった言葉をきっかけに、部屋の窓掛けが「日本から渡来した古い金糸の繻のある布で造つてあるのに氣がついた」(前61)岸本は、その熱い憧憬の念について、確信を持って「その部屋にあるものは何一つとして遠い異国に対する憧憬の心を語つて居ないものは無かつた。斯ういふ老婦人の姪に、異国趣味そのものとも言ひたいマドマゼエルのやうな人が生れたのも決して不思議は無い」(同上)と判断するのである。しかし、フランス理解の進展によつて、叔母・姪に継承されるジャポニスムという趣味的な好尚の系譜という理解は、歴史的視点の導入によつて一新されるのである。

リモージュに戦乱を避けていた岸本へモレル老婦人の死去の通知が伝えられた時、岸本は次のように追悼する。「王朝時代の昔を忘れかねて居たやうなあの仏蘭西の夫人が心の中心を失つた結果として東洋諸国に対する夢のやうな憧憬を抱いたのか、奈何か、その辺までは彼にも言ふことが出来なかつた」(前106)と慎重に断定を慎んでいるが、「その辺までは」という言い回しは、「王朝」時代への郷愁に牽引される国民の心の傷痕が、それを埋め合わせるために広範な異国趣味を発生させることになつたという認識を、岸本が予備知識として持っていたことを証明する書きかたである。換言するならば、岸本は革命によつて打倒された王制の崩壊、身分制度の根底からの変更等に精神の抛り所を見失つた階層において、故国に対する深い失望の念を代償するエキゾチシズムを瀰漫させたという見解を仏蘭西近代史に発見していたことを示している。岸本は王制への郷愁を刻印された証人であるモレル老婦人によつて、現在

にまで流動する生きた歴史を遠望することになったのである。

「四十の手習」(前56)の甲斐あって、前篇百十二回には、リモージュを離れ再度巴里の旅窓に暮らし始めたとき、以下のような注目すべき変化が岸本に生まれる。

心の悲哀を忘れるために学び始めた新しい言葉の芽も一息に延びて来た。読まう／＼としても読めずに蔵つて置いた書籍を取出して見ると、何時の間にか意味が釈れるやうに成つて居た時は、彼は青年時代の昔と同じやうな嬉しさを感じた。大きな蔵の中にでも納つてある物のやうな気がして居たラテン民族の学芸は遽かに彼の前に展けて来た。あそこに詩の精神がある、こゝに歴史の精神がある、と言ふことが出来るやうに成つた。何等の先入主に成つたものをも有たなかつた彼に取つては、殆んど応接するに暇の無いやうな斯の新天地の眺望ほど旅の不自由を忘れさせるものはなかつた。

読書の関心が、文学の範囲を超えて歴史の分野にまで広がり、新しい学芸の世界が広く摂取されるようになったことは、岸本のフランス理解に裨益する画期的な出来事であつた。このような批評的な「眺望」が、どのように岸本の異文化体験の内容を変化させていったかについて、今しばらく説明しておく。

ラテン民族の学芸の世界に接近することが可能になったことを契機に、フランスの歴史・文化についてはいうまでもなく、目下の政治情勢等を俯瞰する主体的な仏蘭西理解が随所に現れてくる。岸本がモレル老婦人を通して、王政への郷愁、革命によって引き起こされた政治的混乱を回避する国民の満たされない精神を癒す代償として国外に追求めたエキゾチシズムが、現在にまで貫流していることについて気づいていたことはすでに述べた。病んだ時代精神を典型化した岸本の愛唱詩人(ボード

レール)が苦しんだ寂寥感が、現在にまで貫流していること等の例示は、学芸への接触をきっかけに一気に飛躍し始めた岸本のフランス理解の進展の一端である。過去は茫漠とした時間の彼方にあるのではなく、現下のフランス社会の底を流動し連続しているという確固たる認識を手引きされた。異文化に翻弄されるデランネのような旅行者は、ようやく仏蘭西を総合的に展望する視点を獲得したのである。

それは早速、前篇百二十七回において、実地での見聞に学芸に接触した知見が裏打ちをする相乗効果となって現れ、戦時下の仏蘭西のさまざまな政治・宗教等を包括して広い視野から眺め渡すような批評的立場の確立となる。つまり、ラテン民族から得られた新知識は、フランスの全体的理解に裨益し、岸本が見出したフランス国内に沸騰する再生の機運は、「曾て一度は頹廢し、爛熟し、衰退したものゝ再生でないものは無かつた。」(前127)という総括的な判断を下せるまでに充実の度を高めていくのである。そして、「斯の眺望は岸本が春待つ心を一層深くさせた。」(同上)とあるように、岸本の自己更生への意欲は、仏蘭西理解の飛躍的な進展に担保されることによって、強調される仕組みになっているのである。

ところで、岸本の内的な賦活と外への批評精神の活性化は、岸本の父親理解を歴史と血脈の両面から深化させる。戦時下の仏蘭西の政治状況を俯瞰できる批評的な立脚地が獲得されたことは、幕末維新期の「愛国運動」(前124)に身を投じた父の実行の精神について認識を一変させていく。つまり、フランスの愛国運動は個を国難に立ち向かわせ全体へ包摂する再生への一大行動であつたように、岸本は一村の子弟の「お師匠様」(前122)と敬愛された父が、失敗の多い悩ましい半生を、愛国運動へ挺身する至誠の行動に純化することで救われようとした、という理解

に及ぶことになる。父親が捨身による更生にまで突き進んだという理想化は、現下のフランスの国を挙げての「回生の力」(前135)に感化される岸本の再生への欲求を一層鼓舞することになるのである。

本論・その二

蠱惑的な愛の高調された到達点

岸本の心象風景であった赤く凍りついた太陽の表現が三段階に変容していくという見通しを述べたが、前篇の岸本に付き纏った太陽の隠喩表現は、帰国後の岸本の内面変化に応じて、急速に過去のものとなった。後篇五十八回に、岸本の心胸の痛みを仮託した「赤熱の色に燃えてしかも凍り果てるといふ太陽」の表現が引かれる。しかし、その時の初冬の景観は、冬籠りの巴里でうんざりするほど見飽きてきた陰鬱な太陽ではなく、小春日和の眩い陽光となっている。岸本を拘束した寒空に懸かる隠喩としての「銅盤」(前124)のような太陽の表現は、ここで初めて拘束を解かれて本来の無尽蔵な輝きを回復したのである。

また、太陽のイメージの大きな変容が、岸本の内面の転換とどのように関連していたかということ、渡仏中念願していた「幼い心」に帰ろうとして果たせなかったことが、節子に対して醸成された「誠実」をきっかけに、「持つて生れたまゝの幼い心に立ち帰つて行ける日が漸くやつて来たことを思ひ知るやうに成つた。」(後59)とある。「情熱を寄せ得るもののある」(同上)こと自体に驚喜する岸本は、「真心」(同上)を失った憐れむべき人非人からの人間回復を果たす。このように、太陽の変容表現は「愛の誠」を確認できた「生の歓び」(後59)を実感する賦活された内面の変化によって裏づけられているのであるから、地の文化され

た「秋の歌」への言及がこの回で終結したのは、岸本の変容から言っても当然である。

岸本は、渡欧という長い迂回路を経てようやく賜物としての節子に出会うことになる。前篇の節子は、すでに故国から脱出を急ぐ岸本に宛てた手紙で、「斯の世の中には、人情の外の人情といふやうなものがある、それを自分は思ひ知るやうに成つて来た」(前45)と踏みこんだ驚くべき告白をしている。上記の「人情の外の人情」とは、前掲の「感想」中にあった「道徳ならぬ道徳の曙光」と関連するものであろう。そして「お前さん」というよそよそしい言い方ではなく『お前』で沢山ではないか」と言い切った呼びかけは、岸本を受け入れたことを伝える決定的な訴えである。このようにして節子は関係を是認する確信を岸本の外遊中も帰国後も保ち続けて行つたのである。

節子の内面的な確信の強さは、岸本に手紙・手帳等によって送り続けられる相聞的メッセージ、情熱的な連作の短歌、万感の情を溢れさせた走り書き的メモなどによって豊かに印象づけられることが注意の為所である。また、岸本が強調する「愛の誠」は、「かゞやける道あゆみ行く二人なり鴛鴦のちぎりもなど羨まむ」(後75)、「君もなく我が身もなくて魂一つ静かにはるのひかりのなかに」(後79)などの尽きることなく湧き出てくる相聞の短歌によって、節子も「愛の誠」の感動に唱和しているのである。「愛の誠」を生きる二人の甘美な場面は抑制の効いた形をとりながら書き込まれ続けている。岸本のひとりよがりの独演ではない。

ボードレール「秋の歌」が三段階の変容を終えるのと並行して、若き日に傾倒したアベラールの英雄的な恋愛譚と、エロイーズとの間に作りあげた浄福的な世界への共鳴が、生の愉悅と充実を暗喩する「音楽」を

伴いながら至福の愛の到達境を完成している。前篇の岸本単独の孤独を紛らわせ、寂寞を癒す対処法にとどまっていた「音楽」の例（前9・17・19）が、後篇では俄然その晴朗な愛の深い恍惚境のメタファーとして意味を大きく変え、岸本と節子の達した「道徳ならぬ道徳の曙光」を具体的に讃える表現に織り込まれている。例えば後篇百二回において、中野の友人の訳したロセッティの「生命の家」を引用した後、新たな岸本と節子が築き上げた甘美な恍惚的な関係を喩えるキーワードとして「音楽」の語句が使用されているのである。ここには精神の深い諧調の隠喩としての音楽であり、ピアノ等の実際の器楽の音色ではなくなっている。その他、「音楽」に関しては、岸本が「髪のやうに輝いたその葉の間には、歌はない小鳥が隠れて飛んで居て、言葉のない歌を告げ顔である」（後58）という内心の大きな展開を記した断章風の文章を読み直して、「言葉のない歌を告げ顔な歌はない小鳥、それらはみな彼の心の光景だ。」（同上）と再度意味づけなおし、喜びの声なき歌が内心に溢れかえるように感じる場面も同様である。

以上、蠱惑的な愛の高調された世界が照応する表現構造によって集中的に描かれていることを確認してきたが、『新生』には、「道ならぬ醜い」関係の底から是だけの誠実が汲めるといふことは、岸本の精神に勇気をそそぎ入れた。」（後58）という「…ならぬ」という表現が散見する。後篇七十七回には二人が到達した関係について「この世ならぬ夫婦のやうな親しみが黙し勝ちに歩いて居る節子の手を通して岸本の胸に伝はつて来た。」とある表現も参考になる。この一連の表現によって、いずれも一般道徳から逸脱した関係から、旧い道徳観とは相容れない真実を確かに掴み取った関係への到達を強調しているのである。「彼は節子と自分の間に見つけた新しい心が、その真実が、長いこと自分の考へ苦しんで

来た旧い道徳とは相容れないものであることを知つて来た。人生は大きい。この世に成就しがたいもので、しかも真実なものがいくらかもある。」（後65）という表現は、「新しい心」・「その真実」＝「旧い道徳とは相容れないもの」「この世に成就しがたいもので、しかも真実なもの」という関係図式になる。これらは、前記「感想」の「道徳ならぬ道徳の曙光」を具体化する一連の表現と見なせよう。

結びにかえて

本稿において、照応する表現構造とその帰趨の意味するものを中心に論じる意図はある程度果たせたと思うが、テキストとしての結末までを視野に入れた考察としては不十分である。広津和郎「藤村覚え書」（『改造』昭18・10）を始めとして、渡台する節子に果たして救済があるのかという疑念、その間の岸本の自己保身的な居直りを糾弾する批判は今も絶えない。しかし、懺悔公表後の両者が事実婚的な関係を継続することは、近親者間の婚姻を禁じた明治民法七百三十四条に照らしてありえない。「愛を完成するために別れて行つたやうな節子の旅」（後141）で終わる結末は、叔姪の関係による必然の選択である。と同時に、父義雄が独立の生計を立てられない成人の節子に対して、明治民法第八百七十七・八百八十二条の「親権」（後120）としての懲戒権を行使した台湾行は、裏がえせば抑圧する家父長制からの脱出でもあったという観点から論じなければならないと思う。いずれ機会を改めて補正していきたい。

注

- 1 以下の『新生』の本文は、真率な表現を見届けることができる朝日新聞初出原稿を復元した筑摩書房版・現代文学大系8『島崎藤村集(下)』(昭38・11)を使用した。
- 2 小林修『藤村全集』逸文「感想」について」(『実践国文学』26、昭59・10)
- 3 永渕朋枝「『新生』の内なる透谷」(『島崎藤村研究』29、二〇〇一・九)に言及がある。
- 4 姜政均「『新生』―「幼い心」の機能」(『解釈と鑑賞』二〇〇二・一〇)
- 5 下山嬢子「リモオジユ往還―『新生』論(その一)―」(『大東文化大学紀要』一九九二・三)。その他、『新生』の〈宗教性〉(『日本文学』一九九二・一二)もある。
- 6 三好行雄「『新生』論のために―主として方法をめぐって」(『島崎藤村論』昭59・1 筑摩書房)
- 7 「隣人愛」については、田川建三『キリスト教思想への招待』(二〇〇四・三 勁草書房)に以下のように説明されている。「その精神は、『すべての人の役に立つこと』とか、その時代時代にいろいろな言われ方をしてきたが、要するに、自分たちの社会の中に、何らかの理由で、欠乏している人がいたら、それは自分たち全体で支えていかなければならない、という精神である。人間として生きている以上、そうするのが当たり前であって、自然とそのように思ってしまう、というのが伝統というものである。そしてこれは、エルサレムの原始キリスト教団の、多分、ほぼまったく実現していなかった『理想』から話が始まって、徐々に、実際に実行するものとなり、その『自分たち』

の範囲も、小さな宗教集団から、まわりの人々へ、そして、町村の地域共同体へ、都市の自治へ、と広がっていったものである。その意識は更に、世界中にひろがろうとする。世界のどこかに、食えずに困っている人がいたら、私は安心して眠ることができない、という意識へと。」

- 8 ポール・ブールジェの『現代心理論集』(上巻・一八八三年、下巻・一八八五年)は、一八七〇年代に関する最高記録と称される名著であるが、病んだ世代の根本原因を探った批評のオリジナリティーは、政治社会の混乱に原因を説いたところではなく、実証科学が隆盛する時代の分析精神の席捲が、人心を退行させる真因であったことを明らかにしたことにある。藤村の理解は必ずしも正確ではなく、前者の政治的騒乱・社会の体制の腐敗(ドレフュス事件)等に、主たる社会的閉塞感の要因を見出すことに関心が向いている。この理解の仕方と、岸本の考え方は、同一の関係にある。かつて、拙稿「藤村・渡欧時代の内面経路―『仏蘭西だより』・『エトランゼエ』を中心に―」(『北九州大学文学部紀要』22、昭54・4)において、藤村の思想経路を跡づけた時、『エトランゼエ』の九十七・百一の両章(初出は「仏蘭西紀行(五)」・「新小説」大10・10、「仏蘭西紀行(八)」・「新小説」大11・2)をもとに、藤村が言及している「エキゾオチズム」・「寂寞感」をめぐる仏蘭西理解については、ブールジェ『現代心理論集』の論旨が踏まえられていることを指摘したが、その原型となる考え方は『新生』前篇の本文に明示されていることを確認することができる。
- 9 傍線部の「眺望」については、以下のような初版の時点での語句修正によって一層重要性を増している。筑摩書房版『藤村全集』第七巻

の校異にはないが、「眺望」が初版第一部百三十二章において「觀望」と修正された結果、「觀望」が作品中で唯一の用例になるという強意によって、政治・宗教を問わず蘇ろうとする「再生の芽」を感得した確信が一層明確にされている。